幼児期における集団での協調性を育てるための保育

○岡本京子　　＃玉木健弘
（神石高原町立保育所）　（武庫川女子大学）

問　題

保育所では保育内容について日々検討し、子ども一人ひとりが健全な心身の発達が図られるように工夫している。その中で、5歳児は就学を見据えて、集団活動を重視することがある。

5歳児は、集団の中で友達と関わる事が増える。この関わりの中で、協調性が低く、自己中心的な行動が多いと他児とトラブルになることがある。

そのため、望ましい人間関係を構築するためには、協調性を身につける必要がある。そこで、本研究では、協調性を身につける保育実践を検討した。

方　法

調査対象児：公立保育所に通所する5歳児13名(男子8名、女子5名)を対象に実施した。

保育実践の内容：段ボールを用いてクラスで迷路を作成した。段ボールを使用した理由は、今回の調査対象児が3歳児の時に、段ボール迷路で遊んだ経験があること。また、この活動は難易度が低いため、活動しやすい作業であること。さらに、迷路作成は6、7人のグループで作業することで、他児と相談し、考えながら一緒に活動ができるため、段ボールを用いて保育実践を行った。

実施時期：2018年5月から6月に実施した。

発達検査：調査対象児の発達の程度を調べるため、乳幼児発達スケール(三宅・大村・高島・山内・橋本,1989)を実施した。

検査実施時期：2018年4月および7月の2回実施した。

結果および考察

発達検査の結果：4月に実施した総合発達指数は、80から115の範囲であった。また、7月に実施した総合発達指数は80から117であった。

このことから、時期による発達変化は、ほぼない事が示された。

保育実践における活動の変化：第1回目の活動では、2グループを作ることから始めた。保育開始時は、「自分はこうしたい」という自己主張をする子や積み木などで自分のしたい活動をする姿が多く見られた。

自分の思い通りにならない時に、トラブルになることがあるため､保育者は近くで状況を見守り、時には、仲介に入ることもあった。

活動の中で、お互いの思いを言葉や紙に書いて相手に伝えることで、トラブルが減っていった。しかし、困っている子に対して、子ども同士が助け合うことは少なく、保育者に質問をすることが多かった。そのため、保育者が困っている事を全体に伝え、これまでに経験したことを参考にするように伝え1回目の活動を終えた。

2回目は1回目に比べて、大きなトラブルはなくなった｡作業中､うまくいかない事については、すぐに保育者に助けを求めず、子ども同士で試行錯誤する様子が見られた。

活動のまとめでは、迷路のスタートとゴールが繋がっていないことに気づかせ、繋がらなかったことを考えさせた。繋がらなかった理由として、段ボールを切ることに夢中になっていたことに気づかせた。

1回目の活動では、活動内容が理解できず、自分のやりたいことを優先する子どもや自分勝手行動をする子どもが見られた。しかし、2回目の活動は、1回目で見られたような個人行動やトラブルが減少した。また、他児と協力して活動することも増加した。

調査対象クラスは、発達差があるため集団作りが困難なことがある。しかし、活動内容を理解させることで、協力した活動を行う事が明らかとなった。

このことから、他児との協調性を育成するためには、①活動内容の理解、②他児との役割分担、③保育者の支援、④活動の繰り返し、⑤活動内容の振り返り、⑥保育者の支援内容の振り返り、が必要だと考えられる。